

## Dialectica et Neoaristotelismus ——Whiteheadの検討(4)——

赤井清晃

### 7. ニュートン以降の神の問題(1)

先に、我々は、Whiteheadが、『観念の冒険』(*Adventures of Ideas*, 1933)の中で、ニュートンの『プリンキピア』に言及し、美しいシステムとしての太陽系という考えは、「自然の法則」を課する「神」を必要とすることを明らかにしうるには、十分に究極的なものだと考えたということにふれた。その際、『プリンキピア』の一般的註の具体的な箇所として、該当すると思われるのは、次の箇所であろう<sup>1</sup>。

Elegantissima haecce solis, planetarum et cometarum compages non nisi consilio et domino entis intelligentis et potentis oriri potuit.[*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*, Auctore Isaaco Newtono, Editio tertia MDCCXXVI, Paginae ab 526 usque ad 530, Scholium Generale]

supremely elegant structure of the solar system cannot have arisen except by the device and power of an intelligent being. [R.G. Collingwood, *The Idea of Nature*, 1945(1980), Oxford, pp.108-109.]

ここで、きわめて優美な太陽系の諸天体は、知性的(叡智的)で能力のある存在者の配慮と支配なくしては生じ得なかったとされる、その知性的(叡智的)で能力のある存在者は、「神」

<sup>1</sup>ホワットヘッド/種山恭子訳、1980、『観念の冒険』(『ラッセル、ワイトゲンシュタイン、ホワットヘッド』世界の名著70,中央公論社)の訳注(p.501)では、箇所については、周知のこととしてか、『プリンキピア』の一般注としか指示されていない。また、Collingwood, *The Idea of Nature*, 1945, pp.108-109でも、特に箇所を示すことなく、英語訳による『プリンキピア』の一般注の紹介があるので、あわせて掲げておく。

であると解される。Whiteheadが取り上げている「自然の法則」に関する説との関係では、その「自然の法則」を賦課する「神」あるいは「超越的存在」を前提する、あるいは、要請する、ニュートンの自然哲学は、「理神論」に基づくことを典型的にあらわしていると言える所以である。

このニュートンの「賦課」説と同じ立場に立つことによって、カントは、次のように言うことができたのである。

Die Naturforschung geht ihren Gang ganz allein an der Kette der Naturursachen nach allgemeinen Gesetzen derselben, zwar nach der Idee eines Urhebers, aber nicht um die Zweckmäßigkeit, der sie allerwärts nachgeht, von demselben abzuleiten, sondern sein Dasein aus dieser Zweckmäßigkeit, die in den Wesen der Naturdinge gesucht wird, womöglich auch in den Wesen aller Dinge überhaupt, mithin als schlechthin notwendig zu erkennen. [I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B722.]

自然の探究は、自然原因の連鎖をたどり、自然原因の一般的法則に従ってのみ、その道を進む。なるほど、創始者という理念に従うのではあるけれども、自然の探究が、至るところでそれを探究する合目的性を、この創始者から導き出すためではなくて、却って、創始者の現存在を、自然の本質において求められるところの合目的性から認識するためであり、かつ、可能ならば、一切の事物の本質においても、従って、端的に必然的なものとして認識しようとするためなのである。[カント『純粋理性批判』, B722]

ここには、自然の探究を行なう者が、自然の法則を、自然に求めることができる前提、ある

いは、根拠、さら言えば、探究することに意味がある保証としての、自然の法則を「賦課」した者を要請するどころか、却って、すでに認めた自然の法則から、「創始者の現存在を、自然の本質において求められるところの合目的性から認識する」ということが言われている。ここで、「創始者の現存在を・・・認識する」と言われているが、しかし、カントにとっては、その存在証明(論証)は、ある意味で、放棄されたのであって、「創始者の現存在を・・・認識する」ということを、どのような意味に解するべきか、我々は慎重でなければならない。そうではあるけれども、これは、明らかに、前述のニュートンの線上に、カントがあることを示す発言であり、これによって、逆に、次の発言が可能だったのである、と言わなければならないであろう。

Sie begriffen, daß die Vernunft nur das einsieht, was sie selbst nach ihrem Entwurfe hervorbringt, dass sie mit Principien ihrer Urtheile nach beständigen Gesetzen vorangehen und die Natur nötigen müsse auf ihre Fragen zu antworten. [I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B XIII.]

彼ら(自然の探究者)は理解した。理性が洞察するところのものは、理性自身が自己の計画に従ってもたらすもののみである、ということ、理性は恒常的な法則に従った、その判断の原理をもって先行し、自然をして、その質問に答えるように強いなければならない、ということ。[カント『純粋理性批判』、第2版への序言、B XIII]

ここでは、逆に、自然の探究者が、自然を強制して、自然の探究者には、未だ明らかにはなっていないが、自然がもつ法則を、それがいかなるものであるのか、白状するようにしなければならないということが主張されているけれども、このことが可能であるのは、すなわち、先の引用で見たように、自然に法則を賦課した者(創始者)が前提されてのことである。ニュートンにせよ、カントにせよ、彼らの発言は、この前提の正直な吐露というべきであり、この後に続く、一部の人々とは一線を画するものである。因に、ショーペンハウアーは、ルクレティウスを引用しつつ、次のように言っている。

Inzwischen muß ich, um gerecht zu sein, erwähnen, daß, um diese Klappermühle im Gange.

zu erhalten, oft noch ein ganz eigener Kunstgriff angewandt wird, dessen Erfindung auf die Herren Fichte und Schelling zurückzuführen ist. Ich meine den verschmitzten Kniff, dunkel, d.h. unverständlich zu schreiben; wobei die eigentliche Finesse ist, seinen Galimathias so einzurichten, daß der Leser glauben muß, es liege an ihm, wenn er denselben nicht versteht; während der Schreiber sehr wohl weiß, daß es an ihm selbst liegt, indem er eben nichts eigentlich Verstehbares, d.h. klar Gedachtes mitzuteilen hat. Ohne diesen Kunstgriff hätten die Herren Fichte und Schelling ihren Pseudo-Ruhm nicht auf die Beine bringen können. Aber bekanntlich hat denselben Kunstgriff keiner so dreist und in so hohem Grade ausgeübt wie Hegel. .... Hingegen unter der Hülle des unverständlichen Galimathias, da ging es, da machte der Aberwitz Glück. [Schopenhauer, *Über die Universitäts-Philosophie*, in *Sämtliche Werke*, hrsg. von Löhneysen, Bd.IV, S.200-201.]

公平を期するために一言しなくてはならないが、こういうおしゃべり風車にカタカタいわせておくためには、フィヒテ、シェリングの発明と言われる独特の手管がしばしば適用される。つまり、あいまいに、わからぬように書くずるい手口のことである。すなわち、理解出来なくなったとき、読者がこれは自分のせいだと思い込むように駄弁を弄する狡猾さをいう。書き手は伝えるべき何事も、つまり、理解できるものも、明快に考えられたものも何一つもたないのであるから、それが誰のせいかは百も承知の上である。この手管がなくては、フィヒテ、シェリングもかの虚名をものにできなかったであろう。けれども、周知の通り、この手管をヘーゲルほど厚顔にかつ大々的に実行した者はいない...(中略)...しかるに、理解不可能な駄弁に秘匿されて事が進められたから、狂愚は成功を収めたのであった。[ショーペンハウアー『大学の哲学について』Shuhrkamp版、IV巻、S.200-201.]

omnia enim stoldi magis admirantur amantque inversis quae sub verbis latitantia cernunt. [Lucretius, *De rerum natura*, I, 641-642.]

というのも、愚鈍な者たちほど、不可解な言葉によっておおわれたものをすべて、賛美し愛好するから。[ルクレティウス『ものの本性について』I, 641-642.]

ここで、ショーペンハウアーによって批判されているドイツ観念論の哲学者たちは、その Wissenschaftslehre(知識学)を Wissenschaftsleere(学の空疎)<sup>2</sup>と茶化された(というよりも、擲

<sup>2</sup>Schopenhauer, *Über die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde*, in *Sämtliche Werke*, hrsg. von Löhneysen, Bd.III, S.105.

揶された) フィヒテ以降の人たちであって、カントは含まれていないことに注意する必要がある。カントは、ニュートンとともに、自然に法則を賦課した者(創始者)を前提する立場(賦課説)に、分類されるからである。しかし、とりわけ、ショーペンハウアーによって、「論難攻撃罵詈謗怨嗟呪詛擲揶嘲弄の爆発」<sup>3</sup>を浴びせかけられているのは、周知のように、ヘーゲルとその一派であるが、自然の法則についての立場の違いという観点から、賦課説に立つカントと対比して、ヘーゲルの立場をとらえるとすると、コリングウッドの次の言葉が思い出される。

Here lies Hegel's answer to the problem of the relation between human mind and divine mind, which Berkeley left unsolved and Kant gave up as insoluble: the importance of man in the world lies precisely in the fact that he is the vehicle of mind, the form in which God's being or rather becoming develops itself into its crowning phase as the being or becoming of spirit. This resembles pantheism in that the process of the world is conceived as identical with the process of God's self-creative life; but it differs from pantheism in that God in Himself, as the pure creative concept, is prior to the material world and transcends it as its cause. [R.G. Collingwood, *The Idea of Nature*, 1945, p.122.]

パークリが未解決のまま残し、カントが解答不能としてあきらめた、人間の精神と神的精神の間の関係についての問題に対する、ヘーゲルの答が、ここにある。すなわち、世界における人間の重要性は、まさに、次の事実のうちにあるということである。つまり、人間は精神の乗り物(vehicle)<sup>4</sup>であり、それは、その中で、神の存在、いやむしろ、神の生成が、精神の存在、あるいは、生成としての最高の相へと自らを展開する形式である。これは、次の点で、汎神論に似ている。すなわち、世界の過程が、神の自己創造的生の過程と同一視されて懐抱されている点である。しかしまた、これは、次の点で、汎神論とは異なっている。すなわち、神は、神自身において、純粋に創造的概念(懐抱)として、質料的世界に先立ち、質料的世界の原因として、質料的世界を超えているという点で。[コリングウッド、『自然の観念』, Oxford, p.122.]

<sup>3</sup>有田潤氏の表現。『ショーペンハウアー全集 10』白水社, 1973, p.319.

<sup>4</sup>「精神の乗り物」あるいは「魂の乗り物」についての哲学的な意味については、本誌掲載の高橋淳友氏の「トマス・アクィナスにおける Plotinus 像」を参照。

コリングウッドによれば、ヘーゲルの立場は、汎神論との類似性を示しながらも、汎神論とは異なっており、Whitehead がいうところの「自然の法則」に関して言えば、ヘーゲルの立場は、「内在説」に相当するということなるであろう。しかし、ここでも、注意しなければならないのは、コリングウッドが、ヘーゲルに関して、「神(God)」という表現を使っている場合、ヘーゲル自身が、例えば、『精神現象学』の中で言及している、キリスト教の「神(Gott)」のことを指しているのではなくて、「絶対的なもの、絶対者(das Absolute)」(Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, S.587.), あるいは、「精神として自己を知る精神(der sich als Geist wissende Geist)」(Hegel, op.cit., S.591.)を指していると思われる。これに関しては、ヘーゲル研究者から反論が出るかもしれないが、少なくとも、コリングウッドの理解あるいは表現による、ヘーゲルの「神」とは、このようなものであるとみなしなければならないだろう。それは、世界あるいは自然との関係で言えば、超越的ではなくて、むしろ、世界あるいは自然に内在的であるということになるだろう。

コリングウッドは、しかし、ヘーゲルの立場を、パークリおよびカントのそれと対置する形で、次のように位置付けている。

This dynamic world of forms, which Hegel refers to collectively as the Idea, is the source or creator immediately of nature and mediately, through nature, of mind. Thus Hegel rejects the subjective idealism, as he calls it, of Berkeley and Kant, according to which mind is the presupposition or creator of nature; that, says Hegel, inverts the relation between them, and he prefers in this respect the materialistic view of nature as the source of mind. [R.G. Collingwood, *The Idea of Nature*, 1945, pp.122-123.]

ヘーゲルが、ひとまとめにして、理念として言及している諸形式からなる動的な世界は、直接的には、自然の源あるいは創造者であり、間接的には、自然を通して、精神の源あるいは創造者である。こうして、ヘーゲルは、パークリとカントの、ヘーゲルがそう呼ぶところの、主観的観念論を拒絶しているのであるが、これによれば、精神が、自然の前提あるいは創造者なのである。ヘーゲルが言うには、それは、精神と自然の関係を逆転させているのであり、ヘー

ゲルは、この点では、むしろ、精神の源としての自然という物論的見方のほうを選ぶのである。[コリングウッド, 『自然の観念』, Oxford, pp.122-123.]

ここでは、自然に対して精神をより根源的なものと見なす主観的観念論 (subjective idealism) の立場 (すなわち、ヘーゲルがいうところのカントの立場) に対しては、ヘーゲルは、むしろ、自然のほうが精神よりもより根源的である、とする立場に立ちあするが、しかし、かといって、物論 (materialistic view of nature) に立つわけではない。コリングウッドは、ヘーゲルに同意しているわけではなくて、ヘーゲルが批判する、そして、ヘーゲルがいうところの、バークリとカントの主観的観念論を記述し、さらに、ヘーゲルの立場としての「客観的観念論」あるいは「絶対的観念論」を次のように、記述している。

Hegel thoroughly agrees with Plato in regarding the Idea not as a state of mind, or an activity of mind, or a creature of mind, not in short as anything subjective, but as a self-contained and self-existing realm of being which is the appropriate object of mind. This is what Hegel calls 'objective idealism', as opposed to the subjective idealism of Kant, or alternatively 'absolute idealism' because it conceives the Idea as something real in itself and not depending in any way upon the mind that thinks it. [R.G. Collingwood, *The Idea of Nature*, 1945, p.123.]

イデア (観念, 理念) を、精神の状態、精神の活動、精神の造り出したもの、手短かに言えば、何であれ主観的なものとは見なさず、そうではなくて、精神の適切な対象 (客観) であるところの存在者の自己充足的で、自存する領域と見なすという点で、ヘーゲルは、すっかりプラトンに同意する。これが、カントの主観的観念論に対置して、ヘーゲルが「客観的観念論」あるいは「絶対的観念論」と呼ぶものである。なぜなら、「客観的観念論」あるいは「絶対的観念論」は、イデア (観念) を、それ自体として、そして、それを思惟対象とする精神には、いかなる仕方でも決して依存していない何か実在的なものとして懐抱する (概念把握する) からである。[コリングウッド, 『自然の観念』, Oxford, p.123.]

コリングウッドによれば、デカルト的な物心二原論 (Cartesian body-mind dualism) が背景にあり、物心いずれがより根源的であるか、より実在性があるか、という単純な問いに対して、

「心」あるいは精神である、と答えるのが、主観的観念論であり、ヘーゲルは、この立場に対して、プラトンとともに (プラトンを援用して)、イデア (観念, 理念) に実在性をもたせることによって、この素朴な物心二原論を克服したつもりであるのが、ヘーゲルの「客観的観念論」あるいは「絶対的観念論」であるということになるであろう。しかし、もしそうであるとすれば、実際には、バークリもカントも、ヘーゲルが言うような主観的観念論の立場をとったわけではないとみなしなければならないだろう。

## 8. ニュートン以降の神の問題 (2)

ここで、神の問題をめぐって、自然の法則に関する「内在説」や「賦課説」がどのように関係しているかという観点から、Whitehead が、特に、ヘーゲルに対して、いかに対応しているかを知りたいところであるけれども、自然の法則に関する所説の中では、言及がないし、また、『過程と実在』の中でも、ヘーゲルについての言及はあるものの、ブラッドリに対する言及と同様に、ロックなどへの言及と比較すれば、はるかに少ない。それは、意図的に少ないのかもしれないとも思われる。それは、例えば、ジャン・ヴァールが、行なっている、Whitehead の「抱握 (prehension)」や「満足 (satisfaction)」に関する議論の中で、

Cette idée de l'immortalité objective par laquelle un être se détruit et se conserve dans celui qui lui succède est, dans le système de Whitehead, à peu près l'équivalent de l'*Aufhebung* hégélienne. [J. Wahl, *La philosophie spéculative de Whitehead, Vers le concret*, 2004, Paris: Vrin, p.168.] 存在が、それによって、自らを破壊し、それに継起するもののうちで、自らを保存する、客体の不死性というこの理念は、ホワイトヘッドの体系の中では、ヘーゲル的な止揚とほとんど等価である。

と言っているけれども、Whitehead 自身は、『過程と実在』での、数少ない、ヘーゲルへの言及の中で、自分の哲学体系の、ヘーゲルまたはヘーゲル学派への類似を認めつつも、また、それとの違いも表明していることから窺えることである。すなわち、

It is now evident that the final analogy to

philosophies of the Hegelian school, noted in the Preface, is not accidental.....This development is nothing else than the Hegelian development of an idea. [Whitehead, *Process and Reality*, p.167.]

今や、序文で記したヘーゲル学派の哲学への決定的な類似が偶然のものでないことは、明らかである・・・(中略)・・・この展開は、理念のヘーゲルの展開以外の何ものでもない<sup>5</sup>。

と認めているからである。しかし、他方、類似しているということは、等価であるということではない。先の引用で、ジャン・ヴァールが言っている、「ほとんど等価」ということも、正確に言えば、等価ということではない。実際、Whitehead は、ジャン・ヴァールが言及していた satisfaction に関する議論の中で、一般に「主体 (subject)」と呼ばれているものに関して、自分の有機体の哲学の中で、「自己超越体 (superject)」を提示する際に、

In the place of Hegelian hierarchy of categories of thought, the philosophy of organism finds a hierarchy of categories of feeling. [Whitehead, *Process and Reality*, p.166.]

思惟の範疇のヘーゲル的階層組織の代わりに、有機体の哲学は、感受の範疇の階層組織を見出すのである<sup>6</sup>。

と言って、ヘーゲルとの違いを強調しているし、また、ニュートンによって、数学的斉一性を与えられた、流動の理論 (theory of fluxions) には、17世紀と18世紀の哲学者たちによって、二つの側面があることが気づかれはしていた。それらのうち、一方は、すなわち、ロックのいう「個々の存在物の実在する構造」であるところのものであり、これは、Whitehead によれば、「合生 (concrecence)」である。そして、もう一方は、個々の存在物から個々の存在物への、「移行 (transition)」である。しかし、これらは、彼らの著作には、確かにあるけれども、いずれも、彼らによっては、生半可にしか気づかれなかったもので、その後、これらは、ヘーゲルに至って、失われしまったというのである。従って、その記述に、どんなに不整合があるとしても、これらの側面に気づいているロックのほうが、我々

<sup>5</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』、1、p.248。

<sup>6</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』、1、p.246。

が立ち帰って考察するには、有益である、との評定を下している<sup>7</sup>。実際、Whitehead は、次のように言って、自らの立場をヘーゲルのそれと区別している。

Finally, it is lost in the evolutionary monism of Hegel and of his derivative schools. [Whitehead, *Process and Reality*, p.210.]

最終的には、ヘーゲルおよび彼の亜流学派の進化論的一元論において失われる<sup>8</sup>。

以上のことは、『過程と実在』における「把握 (prehension)」や「満足 (satisfaction)」の「主体」あるいは「自己超越体 (superject)」とは何であるか、という問題と、前述の二元論の問題に対する、答の出し方の違いを表していると言えるだろう。Whitehead は、『過程と実在』では、前述のように、また、「自然の法則」に関する『観念の冒険』の議論の中でも、主題的に、ヘーゲルの立場を取り上げていないので、「もし」という仮定の上でのことになるけれども、プラトンの立場がそうであるように、ヘーゲルの場合も、我々が、イデア (観念、理念) の実在性をどのように理解するかによって、「内在説」と「賦課説」の間を揺れ動くことになると思われる。その理解の仕方次第で、「自然の法則」の4つのタイプのうちのどれかに分類するとすれば、「内在説」に近いのではあるが、しかし、見方によっては、4つのどれにも分類し得ず、「自然の法則」の「不在説」になりかねない。Whitehead の立場からすれば、問題外のことであるかもしれない。しかし、このことの検討は、稿を改めたい。(未完)

#### 文献

・Collingwood, R.G., 1945(1980), *The Idea of Nature*, Oxford.

・Hegel, G. W. F., 1970(1980), *Phänomenologie des Geistes*, Werke in zwanzig Bänden, 3, Frankfurt(a. M.): Suhrkamp.

・Kant, I., 1930, *Kritik der reinen Vernunft*, hrsg. von R. Schmidt, Leipzig: Felix Meiner.

・Schopenhauer, A., 1986 (1996), *Über die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde in Parerga und Paralopomena*, I, Sämtliche Werke, Bd.3,

<sup>7</sup> Whitehead, *Process and Reality*, p.210.

<sup>8</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』、1、p.310。

hrsg. von Wolfgang Frhr. von Löhneysen, Frankfurt(a.M.): Suhrkamp.

・ Schopenhauer, A., 1986 (1996), *Über die Univeristäts-Philosophie in Parerga und Paralopomena, I*, Sämtliche Werke, Bd.4, hrsg. von Wolfgang Frhr. von Löhneysen, Frankfurt(a.M.): Suhrkamp.

・ ショーペンハウアー／有田潤訳, 1973, 『ショーペンハウアー全集 10』, 白水社.

・ Lucretius, 1975, *De rerum natura*, with tr. W.H.D. Rouse, Revidés by M.F. Smith, London.

・ Wahl, J., 2004, *La philosophie spéculative de Whitehead, Vers le concret*, Paris: Vrin.

・ Whitehead, A.N., 1967(1933). *Adventures of Ideas*, New York: Macmillan.

・ ホワトヘッド／種山恭子訳, 1980, 『観念の冒険』(『ラッセル, ウイトゲンシュタイン, ホワイトヘッド』世界の名著 70, 中央公論社) 所収.

・ Whitehead, A.N., 1978. *Process and Reality*, Corrected Edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W.Sherburne, New York.

・ A.N. ホワトヘッド／平林康之訳, 1983, 『過程と実在, コスモロジーへの試論』 1, 2, みすず書房.

(あかい きよあき, 広島大学 [哲学])